

# 教師の成長における教育実習の意義

— JICA 国別研修「ザンビア 教員養成課程と附属学校の連携による理数科 PCK の促進」  
「マラウイ 教員養成機関におけるカリキュラム開発」における講義報告 —

森下 真実

広島都市学園大学 子ども教育学部

## 要 旨

本稿の目的は、筆者が実施した「教師の成長における教育実習の意義」の講義報告をすることである。講義の位置づけを押さえた上で、講義の内容を①実習生の姿、②実習の事前事後指導、③研究の知見、の3つから整理した。そのうえで、講義のまとめおよび講義での質疑応答のまとめを行ない、講義の課題を明らかにした。

**キーワード：**教師の成長、教育実習、教員養成

## はじめに

本稿の目的は、「教師の成長における教育実習の意義」の講義報告をすることである。広島大学大学院国際協力研究科は、独立行政法人国際協力機構（以下JICAと略）と連携して「JICA国別研修『ザンビア 教員養成課程と附属学校の連携による理数科PCKの促進』『マラウイ 教員養成機関におけるカリキュラム開発（中等理数科教育）』」（以下、研修と略）を実施した<sup>i</sup>。筆者は、広島大学大学院国際協力研究科より依頼を受け、「教師の成長における教育実習の意義—先行研究から得られる知見を中心に—」というテーマの講義を実施した。以下では、筆者が実施した講義の内容を報告する。

## 1. 研修の目標と講義の位置づけ

### （1）研修の目標

広島大学大学院国際協力研究科によって作成された研修資料によると、研修の目標は「日本の教員養成大学における附属校との連携にかかる制度・施策と実際についての学びを通して、研修受講者それぞれの視座から、ザンビアにおける教員養成校と協力校の連携の具体的イメージ（自分のできそうなこと）を持つ」<sup>ii</sup>とある。この研修の目標のもとに設定されているのが、次に示す到達目標である<sup>iii</sup>。

①本研修の学習目標設定

②日本の教員養成大学と附属校の連携にかかる制度・施策についての理解

日本の教師教育制度、大学と附属校の連携、教育実習の意義、運営・支援制度について理解する。

③大学と附属校の連携の実際についての理解

日本の大学と附属校の連携の実際（教育実習の指導，公開授業研究会の開催，研究紀要の発行，次期カリキュラムの試行，授業研究，教材開発など）について理解する。

④教育実習を支える理論的知識の習得

教材研究およびPCK（pedagogical content knowledge）の基礎的な知識を身につける。

また，それらを教員養成校と学校の連携活動で促進させるためのアイデアを持つ。

⑤本研修の目標到達の確認

## （2）講義の位置づけ

筆者が実施した講義は，上述した到達目標のうち，「日本の教員養成大学と附属校の連携にかかる制度・施策についての理解」に位置づく。この到達目標を達成するために構成されたのが，次の4つの研修テーマ・内容である<sup>iv</sup>。

①教員養成カリキュラムにおける教育実習と教職実践演習

日本の教員養成課程における入学者選抜，養成カリキュラムの構造（教職に関する科目，教科に関する科目）についての講義を聴き，教育実習の位置づけ，ひろくは教員養成カリキュラムの具体的なイメージをもつ。

②教師の成長における教育実習の意義 — 先行研究から得られる知見を中心に —

教師の成長における教育実習の意義について，諸先行研究から得られる知見を集約した講義を聴き，教育実習のあり方（どのような教育実習が教師の成長に資するか）についての具体的なイメージをもつ。

③教育実習の運営における教育学部支援室・教育実習部会の組織と役割

日本の教育実習の運営・支援体制（関係組織と役割）の全体像について関係者（教育実習部会長＝研究科長補佐）の講義を聴き，教育実習支援体制のあり方についての具体的なイメージを持つ。

④大学教員の視座から見た大学と附属校の連携 — 教育実習指導を中心に —

教育実習部会の大学教員から，教育実習指導についての講義を聴き，附属校と大学教員の関わり方についての具体的なイメージを持つ。

4つの研修テーマ・内容は，上述した順番で実施され，筆者の講義は，①教員養成カリキュラムにおける教育実習と教職実践演習の内容と③教育実習の運営における教育学部支援室・教育実習部会の組織と役割の間に位置づくものであった。このことから，講義を考える際には，「日本の教育実習はどのように実施されているのか」という具体例を組み込むことが必要であると捉えた。

## 2. 講義の内容

上述したことを意識しながら，講義は次のように構成した。

I 実習生の姿

II 実習の事前事後指導

### Ⅲ 研究の知見

以下では、それぞれの内容を報告する。

#### (1) 実習生の姿

はじめに、わが国の実習生が初めて実習校へ出勤をする場面から実習終了まで一連の流れを捉えたDVD（櫻井、橋本監修）を用いて、実習校における実習生の姿についてのイメージを持ってもらうこととした。時おり映像を止めながら、次に示す、わが国における実習で共通して行なわれている基本的な事項について補足説明をした。

- ・出勤時は基本的にスーツを着用し、出勤した際には出勤簿に印鑑を押すこと
- ・実習校の教師による講話があることとその内容
- ・模擬授業、授業実習、検討会の内容
- ・実習最終日のお別れ会の内容

実習生が実際に行なった実習に密着して作成されたものであるため、実習生の動きや実習に向かう姿勢、悩みや喜びが捉えられており、受講生から笑いや拍手が起きる場面もあった。

#### (2) 実習の事前事後指導

##### ①事前事後指導の位置づけ

図1を示し、実習の事前事後指導の位置づけを説明した。具体的な内容は、以下のとおりである。

- ・「教育実習」と「事前事後指導」はセットである
- ・「教育実習」と「事前事後指導」は、大学の講義やボランティア等を通した「教師の仕事や授業などについての学び」と連続性を持つ
- ・これらはすべて学生が「教師として成長を続ける」という見通しを持って実施する

こうした位置づけを確認した上で、筆者が所属する大学における実習の事前事後指導を事例として、大学における実習生の姿についてのイメージを持ってもらうこととした。

##### ②事前指導の具体

実習の事前指導の内容は、主に次の2点であることを説明し、その中身を概説した。

- ・実習へ向かう構えをつくる（「実習の目的、目標」「倫理的配慮」「実習の心得」）
- ・指導案や実習記録を具体的に学ぶ（指導案と実習記録の説明および模擬授業会）

その上で、当日は「指導案や実習記録を具体的に学ぶ」ことの内容に重点を置いて説明

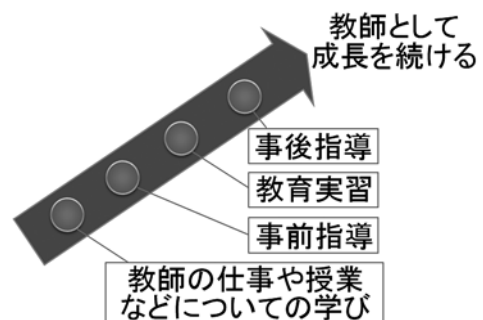


図1 事前事後指導の位置づけ

をした。具体的には、筆者が所属する大学で実際に用いている「実習記録（実習日誌、授業観察記録、授業実習記録）」、「指導案」を資料として配布し、模擬授業会のねらいを説明したうえで学生の様子を捉えた写真を用いた。

### ③事後指導の具体

実習の事後指導の内容は、主に次の2点であることを説明し、その中身を概説した。

- ・自己課題の明確化

実習記録をもとに自分の実習をふり返ることで、教師を目指す上での自己課題を明確化する

- ・実習報告会の開催

大学教員や後輩に対し、実習における自身の学びについて報告する

ここでは、あくまで実習は実習期間が終了すれば終わりではないこと、教師を目指すための一里塚であることを強調した。

## （3）研究の知見

### ①教師にとっての教育実習の意味

教育実習は、教員養成を担う大学にとって、教員養成の質を高めるために重要なもののひとつである。そのため、各大学では、自校の学生の実態を踏まえて、実習にかかわる指導や実習の内容、カリキュラムの在り方を検討する研究が多く行なわれている。ただし、今回の講義の特徴からすると、より広く教育実習について取り扱った研究から知見を得る必要があると考えた。そこで着目したのが、米沢（2008a, 2008 b, 2010）の研究である。

米沢は、教育実習に関する先行研究を概観し、教育実習の経験は、教職志望学生および現職教員にとって、教師としての力量を形成する上で重要であるが、「現職教員となった彼らが教育実習経験をどのようにとらえ、どのような教育実習の内容に意義があると考えているのか、あるいは、養成段階の教職志望学生との間にどのような意識の差異がみられるのか」（2008b, p.55）は詳細に検討されていないとする。

こうした問題関心のもと、ある県の平成16年度小学校新規採用者142名を対象とした調査（無記名・郵送質問紙法、88名の有効回答）を通して「教育実習の意義をめぐって、初任者の現在と回想的質問紙法によって振り返った過去（教育実習生時代）の意識を比較」（2008a, p.12）している<sup>v</sup>。その結果、「初任者が、教育実習経験をその後の彼らの職能成長を支えるための教職に対する構えや教授方法・技術、教師の役割や教育についての考え、子ども理解や教職意識といった教師としての力量の基礎を教育実習において形成していることが確認できた」（p.19）と結論付けている。<sup>vi</sup>

### ②教育実習を仕組む立場に立ったときに配慮しなければならないこと

では、教師として成長をしていくことを射程に入れて教育実習を仕組む立場に立ったときに配慮しなければならないことは何だろうか。この問いを考えるひとつの手がかりとし

て提示したのが、今津（2012）の考えである。

今津は、『資質』とは生まれつきの性質で得手不得手や人柄などに関わり、あまり変化することのない個人の特性である。それに対して、『能力』とは教育によって成長して変化する知識・技術を意味する」（p.26）と定義し、教師の資質・能力の関係について、具体事例を基に説明をしている。少し長いが、引用したい。

「子どもが好き」という態度は教師の資質の側面に属する。しかし、「たとえ肌が合わないと感じる子ども、意思疎通をはかってその子を理解しようとする」資質を発揮するためには、子ども理解に関する一定の知識と技術を必要とする。（p.49）

「子どもが好き」であることは教師の人間性としての資質だけに根ざすのではなく、能力の側面がないと実は子どもが好きな教師にはなれないのだ。逆に言えば、能力を高めることによって、肌が合わずに手がかり過ぎる（と感じる）子どもが苦手という根深くて固定的な資質にも少しずつ変化が生じるかもしれない。（p.50）

資質と能力	内 容	外からの観察・評価	個別的・普遍的状況対応
能力 ↑ ↓ 資質	A 勤務校での問題解決と、課題達成の技能 B 教科指導・生徒指導の知識・技術 C 学級・学校マネジメントの知識・技術 D 子ども・保護者・同僚との対人関係力 E 授業観・子ども観・教育観の練磨 F 教職自己成長に向けた探究心	易 ↑ ↓ 難	個別的 ↑ ↓ 普遍的

図2 資質・能力の層構成（今津，p.64）

このように、今津は、教師の資質・能力は様々な力量が総合的に積み重なるものであるとし、その全体を六層構成で示す（図2）。AはBを基礎とし、C～Fに支えられて実現する。教員養成や現職研修では外から観察・評価がしやすいBとCに力点が置かれるが、D～Fが不十分であれば、身につけた知識・技術が学校組織の中で生かされ

ない、年数が経過すると共に身につけた知識・技術が衰退しやすくなるなど、Aの実施に困難が生じる。そのため、今津は、それぞれの層を有機的に関連付けながら全体でとらえる視点が大事であるとする。

## おわりに

### （1）講義のまとめ

講義のまとめとして、筆者自身が講義準備を進める中で再認識した、実習の指導を行なううえで大切にしなければならないことについて述べた。内容は、以下の通りである。

#### ①実習生の考察の仕方

実習記録には、必ず実習生自身が「考察」をする部分を取り入れている。この考察の仕方によって、実習生の学びの質は大きく異なる。たとえば、もっと児童の発言を取り上げ

るよう実習校の教員より指導を受けた際、「その大切さを実感した」などの感想を述べるだけでなく、「児童の発言を取り上げる」ことについて、実習校の教員の授業を見て気づいたことを踏まえ、その意義や具体的な方法について自分なりに考えを深めていくなど、今津のいう「探究心を磨く」ことを意識した考察も可能である。指導の際には、どのような考察が実習生の成長となるのか、その考察のし方をより意識する必要があると考えた。

## ②実習生のものの見方

実習に行くとき実習生は目の前のことしか見えなくなりがちである。その中でも特に「授業」に強く関心を持つようである。もちろん、それ自体に問題はない。自身が行なう授業の準備に多くの時間を割くのは当然であるし、自身が授業を行なうから実習校の教員の授業も真剣に観察することができる。ただ、その際、どうしても「HOW TO」の部分のみに目を向けがちになる。「HOW TO」の背景にある教材観、児童観、指導観にまで目を向けることができれば、たとえば子ども理解の方法等についての大学での学びと、実習校の教員の指導や目の前の児童の姿を関連づけながら、自身のものの見方を鍛えていくこともできる。指導の際には、こうした実習生のものの見方をより意識することが大事であると考えた。

## (2) 質疑応答のまとめ

筆者の講義に対して、内容の事実確認以外では、次のような質問が出た。

- ①教育実習中の養成校の教員の仕事は何か
- ②教育実習と実習校がうまくつながるためにはどうしたらよいか
- ③教育実習のネガティブな側面はあるか

以下では、この質問に対する筆者の受け答えをまとめる。

①については、主に、実習校への訪問指導と、実習生の指導・支援であると答えた。実習校への訪問指導の際には、校長に実習生の様子（実習を行なっていく上で問題がないかの確認も含む）を尋ね、実習生が実習に向けて養成校で準備をしてきた内容や様子を伝える。あわせて、できるだけ実習生と話をする機会を設けてもらえるよう申し出をし、実習生に体調や毎日の提出物、実習の進み具合について確認する。その他、養成校の教員による実習生の指導・支援は、実習生の実態により異なるが、あくまでも実習校の教員からの指導・支援を基本として適宜行なうものである。

②については、実習を行なう際にとっても重要で、実習の事前事後指導や実習校への訪問において心がけていることであると答えた。ただし、大学附属ではない実習校との連携は、難しさがあることも伝えた。実習校の教員と養成校の教員とが直接顔をあわせる機会は限られている。その中で連携していくために、養成校での指導を確実に行なうこと、その指導および実習生の学修を実習校と共有し、実習生と一緒に育ててもらいたいというスタンスで臨むことが養成校側には求められるだろう。

③については、実習生にとって、実習は自分の将来就きたい職に直接繋がる学びである

ため、「ネガティブ」という言葉でイメージすることはあまりないと答えた。ただし、実習は、学生にとって大変であることは間違いない。準備をがんばりすぎてしまい体調を崩す学生もいる。筆者の所属する大学ではないが、実習を終えて進路を変更する学生もいるという。もちろん、進路は学生自身が責任を持って決定するものではあるが、養成校の教員は、実習が学生の進路に与える影響も考慮して指導する必要があると考える。

このように、当日受けた質問は、いずれもわが国の教育実習にとって重要なものであり、配慮しなければならないことであった。筆者からすれば、実習指導における重要なことを再確認することに繋がった。ただし、質問の内容が「教師の成長」についてというよりは「教育実習の具体」に終始していたことは、筆者の講義に不十分さがあったと捉えなければならない。実習を通して学生は変わる。その変化を具体的に捉え、先行研究の知見から検討していくことで、より「教師の成長」に言及した講義になったであろう。今後の課題としたい。

#### 注

- i 研修期間は、2016年9月17日～10月5日であり、筆者は9月26日に講義を実施した。
- ii JICA国別研修「ザンビア 教員養成課程と附属学校の連携による理数科PCKの促進」ならびに「マラウイ 教員養成機関におけるカリキュラム開発（中等理数科教育）」研修資料より引用。
- iii JICA国別研修「ザンビア 教員養成課程と附属学校の連携による理数科PCKの促進」ならびに「マラウイ 教員養成機関におけるカリキュラム開発（中等理数科教育）」研修資料より引用。
- iv JICA国別研修「ザンビア 教員養成課程と附属学校の連携による理数科PCKの促進」ならびに「マラウイ 教員養成機関におけるカリキュラム開発（中等理数科教育）」研修資料より引用
- v 当日は、調査結果をpp.18-19より引用して紹介した。
- vi 当日は、米沢（2010）で実施をした調査の内容についても紹介し、結果をpp.239-p.242より引用して紹介した。

#### 参考文献

- 今津 孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店、2012年。
- 櫻井 眞治、橋本 創一監修『『教育実習』第1巻 小学校』東京学芸大学教育実践研究支援センター、2014年11月。
- 米沢 崇「教育実習における教師としての力量形成に対する教職志望学生と初任者の意識の検討」『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』59(1), pp.237-244, 2010年。
- 米沢 崇「初任者からみた教育実習経験の意義に関する一考察」『教育実践学研究』10(1), pp.11-20, 2008年a。
- 米沢 崇「我が国における教育実習研究の課題と展望」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』(57), pp.51-58, 2008年b。